2024 年 5 月 16 日（木）

使徒言行録研究　60
使徒１３：１－３

使徒言行録はこの 13 章から新しい大きな段落に入る。
1 章から 9 章までは、エルサレムにキリスト教会が生まれて、そのキリスト教会がユダヤ、ガリラヤ、サマリアに至るまで枝を広げた、という成長ぶりを描いた。
10 章から 12 章までは、異邦人伝道の始まりを伝えている。具体的には以下のこと。

１．10 章から 11 章 18 節まで、イタリア人コルネリウス一家の受洗物語。
２．11 章 19 節から 12 章まで、エルサレム教会を助けるほどの実力を備えたアンティオキア教会の誕生。

今日の 13 章から、上記のアンティオキア教会が海外宣教にバルナバとパウロを派遣するという大きな段落に入る。

１節

「アンティオキアでは、そこの教会にバルナバ、ニゲルと呼ばれるシメオン、キレネ人のルキオ、領主ヘロデと一緒に育ったマナエン、サウロなど、預言する者や教師たちがいた。」

「預言者や教師たち」とあるが、神の言葉を預かり告げるという点では一緒である。つまり、名前が挙がっている人々は、預言者であり教師である。
「ニゲルと呼ばれるシメオン」。**「ニゲル」**というのは**「ニグロ」**ということで「黒人」である。しかし**「シメオン」**と言う名前から分かるように、ユダヤ人であったと思われる。
「キレネ人ルキオ」。この人は**「キレネ人」**であるから、恐らく11章20節で**「キプロス島やキレネから来た者がいて、アンティオキアへ行き、ギリシア語を話す人々にも語りかけ」**伝道している、それがアンティオキア教会の始まりとなった、とあるから、恐らくこの時の**「キレネ」**人の中の一人、最も早くから教会員であった人物だろうと思われる。**「ルキオ」**というラテン語の名前をギリシア語で読むと**「ルカ」**になるが、しかし、ルカによる福音書と使徒言行録の著者であるルカのことではないだろう、と学者たちはいう。

「領主ヘロデと一緒に育ったマナエン」。**「マナエン」**とは**「慰める者」**という意味の名前。彼は**「領主ヘロデと一緒に育った」**とある。**「領主ヘロデ」**とは、ヘロデ・アンティパス、ルカによる福音書3章1節に出てくる人である。
こういう**「ヘロデと一緒に育った」**ほどの人物が、ちゃんとアンティオキア教会の教師になっている。ルカによる福音書８章３節には、主イエスにお仕えした女弟子たちの中にも**「ヘロデの家令クザの妻ヨハナ」**という人物が紹介されているように、意外と早くから、ヘロデ領主の宮廷に福音が入っていたことが分かる。

２節

「彼らが主を礼拝し、断食していると、聖霊が告げた。『さあ、バルナバとサウロをわたしのために選び出しなさい。わたしが前もって二人に決めておいた仕事に当たらせるために。』」

「彼ら」とは、直前にあった**「預言者たちや教師たち」**のことだけではなく、恐らくアンティオキア教会全体、教会の皆が礼拝しているときに、神様の御告げが下ったのだと思われる。

ここで初めて**「礼拝する」**という言葉（λειτουργέω、**レイトュールゲオー**）が出てくる。今までは、“祈る”とか“賛美する”とかいうばらばらの礼拝行為が語られて来ただけ。

この言葉は、旧約聖書のギリシア語訳では、祭司やレビ人の務めを表すところに用いられた。そこから、ルカによる福音書の1章23節のザカリアは**「やがて、務めの期間が終わって自分の家に帰った」**というところで**「務め」**と訳されている言葉が、ここで**「礼拝」**と訳されているのと同じ言葉である。

だから、個々人の人がお祈りをしたり、神をほめたたえたりするのとは違って、もっと公同の、さまざまな要素を含んだ、“祈り”もあれば“賛美”もあるなど、いろんなものを含んだ大きな公の礼拝、これを表しているのであろう。この言葉は、使徒言行録ではここだけ。そればかりではなく**「礼拝する」**対象を**「主」**イエス・キリストと言うのも恐らくここだけ。

その上に、もう一つ、**「断食する」**（νηστεύω、**ネーステウオー**）という、これも使徒言行録では初めてのこと。

以前サウロがダマスコ途上で復活のキリストの光に撃たれて目がくらみ**「直線通り」**というところにある家でアナニアが来るまで待っていた時、9章9節で**「サウロは三日間、目が見えず、食べも飲みもしなかった」**とあるが、これをすぐ後の11節では、キリストがアナニアに説明して**「今、彼は祈っている」**と言い換えている。**「食べも飲みもしない」**つまり、断食しているということは、要するに**「祈っていること」**ということ。

食事の準備や片づけなど、そんなことはやっている暇がない、ただもうひたすら神様に**「祈る」**、これが**「断食」**ということ。

その時に**「聖霊が告げた」**という。これは**「聖霊が」「預言者」**の口を用いてお告げになったという意味であろう。以前４章２５節で**「あなたの僕であり、また、わたしたちの父であるダビデの口を通し、あなたは聖霊によってこうお告げになりました」**という言い方が出て来たように、誰かの**「口を通し」**て**「聖霊」**が**「お告げになる」**（1:16参照）。

この**「二人に」「前もって決めておいた仕事に当たらせる」**、そのために**「選び出せ」**というのである。これは４節以下を読めば分かるように、海を渡って海外宣教に行くと

いう仕事であるが、それは**「前もって決めておいた仕事」**なのだ、と神様は言われている。

少なくともサウロの場合は、ダマスコで召された時、**「すると、主は言われた。『行け。あの者は、異邦人や王たち、またイスラエルの子らにわたしの名を伝えるために、わたしが選んだ器である』」**（９章１５節）と既に言われているから、初めから神様が自分に決めておられる仕事を聞かされて、それで、洗礼を受け、キリスト者として歩んできたのである。

バルナバの場合、自分に前もって決められている仕事があるということを、どれくらい知っていたかは知られていないので分からないが、今までずっとサウロと二人でアンティオキアで働いて来た中で、きっとこの福音宣教のための旅と言うことについてはお互いに語り合ってきていたのではないかと思われる。

３節

「そこで、彼らは断食して祈り、二人の上に手を置いて出発させた。」

「手を置く」というのは、６章のところでパンの配給のことからトラブルが起こったので七人の役員を新しく立てた時、**「使徒たちは、祈って彼らの上に手を置いた」**（６節）、こういう儀式が行われた。いわゆる**「按手礼」**と言われるもの。

しかし、聖書全体を見ると、**「手を置く」**ということはもっと幅広い意味をもっている。例えば、**「手を置いて」**いやした（ルカ４：４０）、幼子の上に**「手を置いて」**祝福された（マルコ１０：１６）など。色んな時に**「手を置く」**ということが行われた。

今日の場合は、既に教師や役員であるバルナバとサウロであるので、任職する按手礼ではない。そうではなくて、ちょうど**「手を置いて祝福された」**と言われるように、神の特別な御加護と祝福を授かるようにという祈りの姿勢であろう。

今まで使徒言行録が記してきた福音宣教は、いろんな形のものがあった。先ず、とにかく自分の近隣の人たちに福音を語るという、ごく自然に付き合いがある中で福音を語る。

次に、ステファノのことで起こった迫害のために散らされて行った人たちは、散らされながら福音の種を蒔いて行った。なぜ、自分は急に旅立ってきたのかとか、なぜ私はこんな所にまで来ているのかとか、いろんな説明をしながら散らされた人たちが福音の種を蒔いた（８：４）。

また、ペトロがヤッファに行くとか、あるいはフィリポがガザに下る道に行くとか、一人の人が旅をして、あるいは巡回をして福音をかたるという形もあった（８：３５、１０：４８）。

今日のところに記されているのは、既述のような形の伝道とは違った、教会が**「手を置いて」「祈って」**送り出すという全く新しい伝道が始まったということである。神様が前もって考えておられたお仕事のためにアンティオキア教会が断食して祈り、礼拝の中で、バルナバとサウルという二人の先生に手を置いて神様の祝福にゆだねて、海外宣

教に行けと送り出す。そういう教会の公の宣教事業が始まった、というのである。こういう新しい形の神の事業に、教会ぐるみで祈って取り組もうという素晴らしい信仰の姿をアンティオキア教会通して見ることができる。

「**出発させた**」と訳されている言葉（ἀπολύω、**アポリュオー**）は、普通は「**釈放する**」という、例えば、使徒言行録３章１３節後半の「**ところが、あなたがたはこのイエスを引き渡し、ピラトが釈放しようと決めているのに、その面前でこの方を拒みました**」とあるところの「**釈放しようと**」と言う言葉がアポリュオーである。４章２１節の「**二人を更に脅かしてから釈放した**」も同じ。何かに縛り付けられていたものを自由の身にして「**釈放する、解放する**」（ to set free, releas）という意味。

今まで、アンティオキア教会の教育のために、あるいは伝道のためにと、バルナバとサウロは初めからずっと働いて来た。しかし、そのアンティオキア教会は、神様が前もって決めておられた仕事のためにその二人を「**釈放した**」―どうぞご自由にお働きください」―これが、ここで「**出発させた**」と訳されている言葉の意味である。

12章において、エルサレム教会は、ゼベダイの子ヤコブを失った。使徒ペトロも、しばらくの間、行方をくらました。若者ヨハネと呼ばれるマルコは、アンティオキアの方に行ってしまった。というので、エルサレム教会がそうそうたる人物を失ったことについて、これまで学んできた。

今度は、アンティオキア教会は、迫害やその他の何かがある訳ではない。でも、最も古い、最も中心的先生たちである「**バルナバとサウロ**」の二人を、主の御用のためならばというので、「自由の身にした」―自分たちの教会からは失ったのである。教会にとってどうしても居て欲しい、欠かすわけにいかないようなこの二人の先生を、アンティオキア教会は主の御用とあらば献げるという、これまた素晴らしい信仰である。

今まで、どこでも行われたことのない全く新しい主の御業のために教会ぐるみで祈って当たるという信仰、そのためには、自分たちにとってかけがえのない先生たちさえも献げて惜しまない信仰である。